



早くしないと、いまに彼女は、手のとどかないところに行ってしまう——

それが、私のあせりでした。

学校時代とちがって、こんどは月給をもらう身になったのですから、こづかいも豊富になってくるでしょう。世の中や男のことなんかについて、目が肥えてくるにちがいません。

そうなのは、やりにくいのです。おまけに恋人なんかつくられてしまったのでは、身もフタもありません。その前に、彼女の、鞭打と

いうことにはまったくの処女地である白い肌、ぴしっと一鞭きめこんでやりたかったのです。私の初花つみとは、そうした鞭あてのことでした。

私はときどき、彼女の家をおとすれて、彼女の様子に気を配りました。彼女が、会社からひけてくる時間を見はからって、ブラリと姿をあらわすのです。もちろん、万知子にはなく、その家のおとなたちに用事のあるような顔をして……

「あ、おじさん、来てたのね」

鞭の花

まだセーラー服のおいのパンパンとしているBG一年生の万知子の初花をつみとりたいたというのが、私の願いである。初花とは、そのけがれない白い臀に鞭の花を咲かせることなのだ！

枝川史郎
江戸川重郎・え

姪の万知子

万知子は私の姪です。ことし高校を出て、丸の内のある海運会社にはいりました。BG一年生というわけです。とはいももの、まだセーラー服のおいが、パンパンしています。そのにおいのうせないうちに、初花をつみとりたいた、というのが、私の願いでした。

——— なんとか、セーラー服を着ているあいだに———
彼女の在学時代には、私は、そう思っていたのですが、ついに果たしませんでした。
そして、彼女をBGとして、ひろい生活の海に船出させてしまったのです。

